研究ノート

虎のイメージに関する一考察

――中国のことばと文化――

鄭　　高　咏

要　　旨

「虎」の原型は中華民族の形成期にまでさかのぼる。原始の時代，獰猛な野獣と向き合った先人たちは，彼らを征服したいと考え，それをイメージ化して自分のシンボルとしたが，中でも「虎」を選んだのは虎の雄々しさに魅せられたからである。中華民族の始祖の一人とされている伝説の神，「伏羲」は虎神であり，また自然を人格化した結果，「虎」は十二支でも最良の部類に属する干支となった。「百獣の王」と称えられる虎は，他を圧倒する実力ゆえに動物界で覇を唱えているが，言語文化や民俗文化においても，強者や王者のイメージ，英雄豪傑のシンボルとして受け取られている。“虎气”，“虎步”，“虎视”，“虎背熊腰”，“虎啸风生”などのほか，現代中国語ではあまり用いられない“虎士”（勇猛な武人），“虎夫”（勇者），“虎彪”（たくましい），“虎旅”（精鋭部隊）などの言葉もあるが，これらは「虎」がその雄々しいイメージから，自ずと軍事に結び付けられ，屈強な軍隊のシンボルとされたために生まれたものである。さらに虎には重厚なイメージがあるため，尊敬や羨望の対象という色彩も帯びている。十二支の「虎［寅］」が人生の理想像であるのは，「寅」の刻は明け方の4時ごろで，良き一日の始まりに当たり，さらに寅月とは正月のことで，良き一年の始まりに当たるためであり，「虎［寅］」は干支としても羨望の的なのである。反面，虎は獰猛，危険，残酷の象徴でもあり，“虎口”，“虎穴”などの言葉や一部の民話はこの負の面を反映している。虎はこの本性ゆえに，悪者の象徴とされ，“龙争虎斗”は横暴の限りを尽くす虎のイメージを映し出している。十二支の虎のイメージは極めて芳しく，民話のイメージは好ましいものとそうでないものがあり，後者がやや勝っている。そして言語におけるイメージもやは

り二面的であるが，こうした人々の相反する心理，すなわち虎を恐れながらも敬うという心理は，多くの原因から生まれたものである。虎のイメージは何百年，何千年もの長きにわたり，絶えず創造と変化を繰り返し，常に生命力をみなぎらせているのである。

キーワード：字源と名称，言語におけるトラ，民話におけるトラ，十二支とトラ，イメージ

1　「虎」の字源と名称

3000年以上前，殷の人々が甲骨や青銅器に刻んだ「虎」の字は書き方にばらつきが見られるが，初期のそれはいずれも象形で，鋭い牙を持つ猛獣が大きく口を開けている形をしていた。その特徴は大きな頭と大きく開いた口であり，甲骨文（図 1），金文（図 2）の「虎」の字はいずれも，大きな口に鋭い牙，そして縞のある体に長い尾を持つ「虎」の姿をよく捉えている。図 1 ～ 5 を見れば，虎の字形の変遷が一目瞭然であろう。また，中国語の文字には「虎」の字を偏や旁とするものがいくつかある。例えば“彪”の本来の字義は虎の斑紋であり，また虎という意味もある。“虒”は古代の想像上の動物で，虎に似た角のある獣であり，“虓”は白い虎，“虪”は黒い虎，“虥”は淡い毛色の虎である。このほか，“虓”は虎が吠える，“虔”は虎が歩く様，“虐”は虎の強く荒々しい様子，“虩”は虎が怒る，“虩”とは 2 匹の虎が争う声を表す。こうした文字は使用頻度こそ高くないが，そこから古代人の虎に対する認識を読み取ることができるのである。

甲骨文字　金文　小篆　隷書　楷書

図 1　図 2　図 3　図 4　図 5

古代は自然の生態環境が良好で，虎は今よりもずっとたくさんおり，人間の生活に少なからぬ影響を与えたことから，多くの別名，異称が生まれた。『水滸伝』を読んだ人にはおなじみの“大虫”とは虎のことで，孫二娘のまたの名，“母大虫”は雌の虎という意味であ

り，唐の李肇による『唐国史外』の巻上にも“大虫老鼠，俱为十二相属。”（虎も鼠も十二支である）という記述がある。“老虫”や“老大虫”も虎の別称であるが，これは“大虫”から来たものである。また『駢雅・釈獣』に“山君，虎也。”（山君とは虎のことである）とあるように，山の王である虎は“山君”と呼ばれ，これによく似た“山王”という異称もあった。“於菟”もまた虎の別称であり，このほか“老饕”，“伯都”，“山神爷”，“白额”，“毛兽”，“啸风子”など，虎に冠せられた名称は実に多彩である。

2　言語の中の「虎」

現代中国語で常用される言葉，成語，ことわざを挙げるにとどめる。“虎卜”（占いの一種），“虎书”（古代の書体の一つ），“虎门”（宮城の正殿の門，いにしえの帝王は政務を執る宮殿を正殿とした），“虎帐”（虎を描いたとばり，本陣），“虎踞龙盘”（虎がうずくまり，竜がとぐろを巻く，地勢が険しい様），“虎斑霞绮”（虎斑（とらふ）のような美しいかすみ），“与虎谋皮”（虎にその皮をよこせと持ち掛ける，できない相談をするたとえ）などの言葉は現代中国語ではほとんど死語になりつつあるため，ここでは取り上げない。

①“虎”（虎）

動詞として用いると，険しい顔付きをする，あるいは恐ろしい形相をするという意味になる。例文:“一提起那件事，他一下子就虎起脸来。”（その件に触れると，彼は急に表情を硬くした）このほか，やはり動詞として，脅す，威嚇するという意味でも用いられる。例文：“老王把他虎回去了。”（王さんは彼を脅しつけて追い返した）

②“虎子”（虎の子），“虎女”（虎の娘）

勇ましく丈夫な男の子を形容して“虎子”という。『三国志・凌統伝』にも“此吾虎子也！”（これは我が息子である）という記述があり，今でも，たくましく男らしい人間に育って欲しいという願いを込めて，自分の息子に“虎子”という幼名を付ける人がいる。“虎女”は女性の美称であり，りりしい女傑のことをいい，『三国演義』七三回に“云长勃然大怒曰：‘吾虎女安肯嫁犬子乎！’”（雲長はにわかに顔色を変え，大喝した。「わしの大事な娘をあのばか息子にやれるか」）とある。この呼称は今でもたまに使われている。

③“虎劲”（虎の意気込み）

人を形容する語で，ものすごい力，エネルギッシュな様を表す。話し言葉としても，書き言葉としても用いる。例文：“要让企业处于不败，就需要我们有一股虎劲，要勇敢、顽强。”（常勝企業であり続けるには，我々の旺盛な士気が必要であり，勇気と根気を持って当たらねばならない）

④“纸老虎”（張り子の虎）

見た目は恐ろしいが，実は大したことはなく，見掛け倒しであることをいう。マイナス評価の語で，話し言葉，書き言葉，いずれの場合も用いる。例文:“他整天虎着脸，摆出一副凶狠的样子，其实只不过是个纸老虎，没什么可畏惧的。”（彼は年がら年中おっかない顔をして，怖そうなふりをしているが，実は張り子の虎で，ちっとも怖くない）

⑤“笑面虎”（笑顔の虎）

表向きはにこにこしていて，優しそうだが，実は冷酷で，いつ牙をむくか分からないことを形容する。マイナス評価の語で，話し言葉でも，書き言葉でも用いる。例文:“那个人可是个笑面虎，你可别被他的假情假义所迷惑。”（あいつは笑顔の仮面の下に恐ろしい本性を隠しているから，彼の偽りの親切に惑わされてはいけないよ）

⑥“拦路虎”（通せんぼをする虎）

“拦路虎”とは普通，仕事や勉強の上で突き当たる壁のことをいうが，人の進歩を妨げる人，あるいはものを指して“拦路虎”という場合もある。マイナス評価の語で，話し言葉としても，書き言葉としても用いる。例文:“我们不能畏惧工作中的拦路虎，要努力克服困难。”（仕事で困難にぶつかることを恐れてはならない，それを乗り越えるよう努力しなければ）

⑦“虎里虎气”（虎に虎の気が宿っている，転じて，精悍である）

人を形容する言葉で，たくましく堂々として，威圧感あふれる様をいう。よく青年や少年に対して用い，主に話し言葉で使われるプラス評価の語である。例文:“父亲看着儿子那虎里虎气的样子，心里别提多欣慰了。”（息子の立派な姿を見て，お父さんは喜びで感無量だった）

⑧“虎头虎脑”（虎の頭と虎の脳）

これは現代中国語の成語であり，丈夫で素直な様をいい，老舎の『趙子曰・三』には“是个年壮力足虎头虎脑的英雄。”（壮年で頼もしい，質実剛健な英雄だ）と記されている。これは古典の成語ではなく，現代中国語で常用される語であり，書き言葉，話し言葉，どちらでも用いるが，話し言葉で用いることが多い。男の子や青少年，壮年を形容するプラス評価の語である。例文:“这孩子今年六岁了，看上去虎头虎脑，招人喜欢。”（この子は今年６歳になるが, 見るからに元気いっぱいであどけない。だからみんなにかわいがられている）

⑨“虎视眈眈”（虎視眈々）

『周易・頤』の“虎视眈眈，其欲逐逐。”（獲物を狙う虎のように注視し，利を得ようと焦る様）が出典である。“眈眈”とは眼光鋭く見つめることであり，この言葉はぎらぎらした目付きで凝視し，いつでも飛び掛かれるよう身構えている様を形容する。非常に比喩的で，描写性の高い言葉であり，書き言葉として用いる。マイナス評価の語で，他国に対する侵

略行為を非難する際に用いられることが多い。

⑩“虎背熊腰”（虎の背と熊の腰）

出典は『元曲選外編』の“这厮倒是一条好汉……哦，是虎背熊腰。”（こやつ，意外にも好漢ではないか……おや，たくましい体付きをしている）であり，背中が虎のように広く，腰が熊のように太いという意味で，体格が立派でがっしりしている様を形容する。中性的な意味の語であるが，ややプラスの評価を表し，主に書き言葉で用いる。描写性が高く，古代の壮士についていうことが多いが，現代の偉丈夫をいうこともある。現代の用法：“如今，他已经长成一个虎背熊腰的小伙子了。”（今や彼は堂々たる体躯の青年に成長した）

⑪“虎口拔牙”（虎の口から牙を抜く）

元の弘済の『一山国師語録』にある“……猛虎口中拔得牙。”（猛虎の口から牙を抜く）から生まれた語である。非常に危険なことをすることのたとえであり，プラス評価の語で，主に書き言葉として改まった場面で用いる。現代の用法：“他知道这个任务十分艰巨，但他已经下了大决心，他有虎口拔牙的勇气。”（彼はこの任務が非常に困難なものであることを承知で，覚悟を決めた。どんな危険をも顧みない勇気の持ち主である）

⑫“虎头蛇尾”（虎の頭と蛇の尾）

元の康進之の『李逵負荊』にある“这厮敢狗行狼心，虎头蛇尾。”（こやつは極悪非道な行いをして，尻すぼみに終わった）から出た言葉である。始めの勢いが終わりに近づくにつれてなくなり，結局は中途半端になってしまうことのたとえであり，話し言葉，書き言葉，いずれでも用いる。マイナス評価の語であり，何事も長続きしない人のことをいう。現代の用法：“他干什么历来都是虎头蛇尾，没有恒心。”（彼は何をやっても竜頭蛇尾で，根気というものがない）

⑬“虎口逃生”（虎口を逃れ，命拾いをする）

元の作者不詳の『朱砂担』にある“我如今在虎口逃生，……。”（私は今，九死に一生を得た，……）が出典である。極めて危険な状態を脱し，奇跡的に一命を取り留めることのたとえであり，主に書き言葉として用いる。中性的な語であるが，プラスの意味合いがやや強く，大災害の生存者について用いる場合が多い。“虎口余生”も用法は同じである。現代の用法：“在那场战争中，他虎口逃生，侥幸得救。”（あの戦火をくぐり抜け，彼は運良く生き残った）

⑭“虎穴龙潭”（虎が住む穴とみずちが住む淵）

『水滸全伝』の61回にこの用法が見られる。“休听那算命的胡说，撇下海阔一个家业，耽惊受怕，去虎穴龙潭里做买卖。”（あの易者のでたらめなんかに耳を貸すんじゃない。うなるほどの家財をかなぐり捨てて，びくびくしながら危地に飛び込んで商売するだなんて）極めて危険な場所のたとえであり，書き言葉で用いる。マイナス評価の語であり，多く危

険を冒して任務を遂行することをいう。現代の用法：“老王为了了解这伙犯罪分子的详情，他深入虎穴龙潭，进入他们的内部。”（王さんはその犯罪グループの詳細を探るために，命懸けでやつらの内部へ潜入していった）

⑮“虎入羊群”（羊の群れに虎が飛び込む）

明の羅貫中の『三国演義』第11回に“……如虎入羊群，纵模莫当，便驱兵出城。”（……虎が羊の群れに飛び込んだかのように，向かう所敵なしの大暴れ，すぐに兵を追い散らして城を出て行った）という記述がある。強者が弱者の中に飛び込み，思う存分威を振るうことのたとえであり，主にマイナス評価の書き言葉として用いる。現代の用法:“这伙土匪如虎入羊群一般，闯入村庄，又抢又杀。”（その賊は羊の群れに飛び込んだ虎のように，村に侵入して強奪と殺戮の限りを尽くした）

⑯“虎狼之心”（虎狼の心）

『史記･秦始皇紀』には“秦王为人，……少恩而虎狼心。”（秦王は……情が薄く，鬼畜のような心の持ち主である）とあり，漢の劉向の『説苑・正諫』には“今秦四塞之国也，有虎狼之心，恐其有木梗之患。”（秦は要害の地にあり，腹黒い国でございます。秦に攻め入れば，恐らくかの地で命を落とし，二度と再び故郷に戻れぬことになりましょう）とある。凶暴で残忍，そして貪欲なことを形容するマイナス評価の語で，主に書き言葉として用いる。現代の用法:“做生意也要讲究道德、人情，不能怀有虎狼之心。”（商売といえども道徳と人情を大切にすべきであり，あこぎであってはならない）

⑰“画虎类狗”（虎を描きて犬に類す）

『後漢書･馬援伝』の“效季良不得，陷为天下轻薄子，所谓画虎不成反类狗者也。”（杜季良[1)]のまねをしたところで，うまくまねることができなければ，それこそ天下の笑い者となろう。虎を描いて犬に似てしまい，ぶざまな結果を招くようなものだ）が出典であり，後に“画虎类狗”と縮められた。高望みをして結局何も成し遂げられず，かえって嘲笑を買ってしまうこと，あるいは技芸や技術を学んでも熟達しないことのたとえである。書き言葉として比較的くだけた場合に用い，マイナスの評価を表す。現代の用法:“学气功，方法要得当，不然画虎类狗，反而对身体有害。”（気功は適切な方法で学ばなければならない。さもないと虎を描いて犬に似るようなもので，かえって体に悪い）“画虎类犬”ともいう。

⑱“放虎归山”（虎を放って山に帰す）

この語の出典は裴松之による『三国志・劉巴伝』三九の注であり，ここで彼は『零陵先賢伝』を引用し，“若使备讨张鲁，是放虎于山林也。”（劉備を張魯討伐に向かわせるのは，虎を山に放つようなもので，二度と戻っては来ないでしょう）と記している。これは劉巴[2)]の劉璋に対する忠言であるが，聞き入れられず，その結果，劉備は着々と勢力を伸ばし，ついには成都に兵を進め，劉璋から政権を奪うことになる。この言葉はやがて悪人，ある

いは敵を野放しにして由々しい事態を招くことのたとえとなった。マイナス評価の語で，話し言葉，書き言葉，どちらでも用いられる。現代の用法:“一些犯人被提前释放后，又在社会上捣乱，影响社会治安，群众对这种放虎归山的作法，十分不满。”（一部の犯人が刑期満了前に釈放され，社会で再び騒ぎを起こし，治安を脅かしている。民衆はこうした虎を野に放つようなやり方を，大変不満に思っている）

⑲“狐假虎威”（虎の威を借る狐）

『戦国策･楚策一』によると，虎が狐を捕まえて食べようとしたところ，狐が言った。「天の神様が私を百獣の王にすると命じられた。だから私を食べることは神様の意に背くことになるぞ。信じないなら，私に付いて来て，私を見掛けた動物たちが逃げ出すかどうか，確かめるといい。」虎はこれに応じ，狐と一緒に歩いた。すると出会う動物がことごとく逃げていくではないか。虎は動物たちが自分を恐れているとは露知らず，てっきり狐を恐れているのだと思い込んでしまったという。これは楚の国の大夫，江乙が宣王に語った寓話で，北方の諸侯が恐れているのは楚の強大な軍隊であって，昭奚恤[3]個人ではないと説いたのである。その後，この成語は人の威光を笠に着て威張ることのたとえとなった。マイナス評価の語であり，話し言葉としても，書き言葉としても用いる。現代の用法:“你别在这儿狐假虎威，拿上头的话来压制我们。”（上司の話を持ち出して我々を押さえ付けようだなんて，そんな虎の威を借る狐みたいなまねはここでは通用しないぞ）

⑳“三人成虎”（三人虎をなす）

『戦国策・魏策・二』から出た言葉である。その原文を引用しよう。“庞葱与太子质于邯郸，谓魏王曰：‘今一人言市有虎，王信之乎？’王曰：‘否。’‘二人言市有虎，王信之乎？’王曰：‘寡人疑之矣。’‘三人言市有虎，王信之乎？’王曰：‘寡人信之矣！’庞葱曰：‘夫市之无虎明矣，然而三人言而成虎。今邯郸之去魏也远于市，而议臣者过于三人，愿王察之。’”これは戦国時代，魏の太子が人質として趙の国へ赴くに当たり，これに同行することになった大夫，龐葱（龐恭とも呼ばれる）と魏王の会話である。龐葱が王に「もし一人，あるいは二人が，街に虎が現れたと申しましたら，これをお信じになりますか」と尋ねると，王は一人なら信じず，二人なら疑うと答えた。さらに龐葱が「では三人ならば」と尋ねると，王は信じると答えた。これを聞き，龐葱は言った。「私は太子にお供して趙の都，邯鄲へ参りますが，かの地と我が魏の都は遠く離れており，王宮と街の距離など比ぶべくもございません。そして必ずや私をそしる者が現れ，その数は一人や二人ではないと存じます。王様にはゆめゆめ軽信なさらず，よくよくお考えくださいますよう。」これが二人の会話の大筋であるが，結局魏王は讒言を信じ，帰国した龐葱を登用することはなかった。後に“三人成虎”という成語は，根も葉もない風説であっても，言う者が多ければ，真実と同じ力を持ってしまうことのたとえとなった。比喩的な語であり，多く書き言葉として用いられ

る。意味的には中性であるが，ややマイナスの色彩を帯びる。現代の用法:“虽然他从未做过坏事，可是经过一些是非的人编排，竟弄得三人成虎，连他的朋友也怀疑起他来了。”（彼はこれまで悪事に手を染めたことなどないが，口さがない人々に中傷され，それがまことしやかに伝わってしまい，友人までもが彼に疑いの目を向けるようになった）

㉑ “暴虎冯河”（暴虎馮河）

『詩経・小雅・小』の“不敢暴虎，不敢冯河。”（素手で虎を打つ気も，徒歩で川を渡る気もない）から来た言葉であり，『論語・述而』にも“暴虎冯河，死而无悔者，吾不与也。”（素手で虎に立ち向かい，素足で川を渡るような命知らずと行動を共にしようとは思わない）という記述が見られる。やがて“暴虎冯河”は，勇気はあるが無謀で，向こう見ずな行為をすることのたとえとなった。比喩的なマイナス評価の語であり，書き言葉として，人の行動について用いる。現代の用法：“如果做事鲁莽，往往会做出暴虎冯河的冒险举动，一定会失败。”（無鉄砲はしばしば暴虎馮河のような危険な行為につながり，やがて良からぬ結果を招くだろう）

㉒ “两虎相斗”（両虎相闘う）

この語は『戦国策・秦第二』の“今两虎争人而斗，小者必死，大者必伤。”（今双方が，人間を奪い合う 2 匹の虎のように争えば，弱者は敗北し，強者もまた痛手を被るであろう）が出典である。また『史記・第78巻・春申君列伝』には“天下莫强于秦、楚。今闻大王欲伐楚，此犹两虎相与斗;两虎相与斗，而驽犬受其毙，不如善楚。”（現在，天下で最強を誇っているのは秦と楚です。昭王様は楚を攻めようとお考えだそうですが，それは 2 匹の虎が相争うようなものです。 2 匹の虎が争えば，駄犬が付け入る隙が生じましょう。そして手負いの虎を食い殺してしまうやも知れません。やはり楚への進撃はおやめになるべきかと存じます）とある。後に“两虎相斗”は両雄が争い，第三者が利益を得ることのたとえとなった。話し言葉，書き言葉，どちらでも用いられる。現代の用法:“在这么关键的时刻两虎相斗，必然导致两败俱伤的结果。”（この正念場で強豪同士がぶつかり合えば，共倒れになるのは必至である）

㉓ “骑虎难下”（虎に乗ると降りるに降りられない）

騎虎の勢い南朝の宋の人，何法盛の『晋中興書』（『太平御覧・四六二・遊説下』），“……今日之事，义无旋踵，骑虎之势，可得下乎？”（……事ここに至っては，後に引くこともできない。虎の背に乗ってしまった以上，どうして降りることができようか）が出典である。物事を始めたからには，途中で困難にぶつかっても，行き掛かり上やめるにやめられず，最後までやり抜くしかないことをいう。話し言葉でも，書き言葉でも用い，よく情勢や境遇の特徴を述べる。現代の用法:“事到如今，我们已经骑虎难下了，只好硬着头皮干到底。”（こうなってしまった以上，投げ出すわけにもいかない。歯を食いしばってとことん

やるのみだ）

㉔“龙争虎斗”（竜虎相搏つ）

元の鄭徳輝の『王粲登楼』四に“收拾了龙争虎斗心。”（死闘を演じてやろうという気持ちを静めた）という記述が見られる。いずれ劣らぬ二者，あるいはそれ以上の者が火花を散らすことのたとえであり，“虎斗龙争”ともいう。意味的に中性の語で，多く競技や闘争が熾烈な様を描写する。話し言葉としても，書き言葉としても用いる。現代の用法：“足球场上龙争虎斗，各国选手的精彩比赛吸引了全世界的足球爱好者。”（サッカー場では激戦が繰り広げられ，各国選手の素晴らしいプレーが世界中のサッカーファンを魅了した）

㉕“龙腾虎跃”（竜が舞い，虎が躍る）

唐の厳従の『擬三国名臣賛序』にある“圣人受命，贤人受任，龙腾虎跃，风流云蒸，求之精微，其道莫不咸系乎天者也。”（聖人や賢人が登用され，世の中は活気に満ち満ちている。俊英が続々と現れており，お上もこうした人材を広く求めている。この風潮はひとえに天のたまものである）が出典である。沸き立つような，賑やかな活気を形容するプラス評価の語で，書き言葉，あるいは話し言葉として，主に大勢の人々について用いる。現代の用法：“这个城市是一派龙腾虎跃的景象，生气勃勃。”（この都市はどこもかしこもエネルギッシュで，躍動感を感じさせる）

㉖“龙骧虎步”（大きな馬が頭をもたげ，虎が闊歩する）

晋の陳寿による『三国志・第21巻・魏書・陳琳伝』の“今将军总皇威，握兵要，龙骧虎步，高下在心。”から生まれた成語である。ここでいう“龙”とは大きな馬のことであり，その昔，体高が8尺以上の駿馬を竜といった。また“骧”は頭をもたげることで，“将军”は何進を指す。これは当時，大将軍府の“主簿”[4)]を努めていた陳琳が何進に呈した忠言であり，意味は次のようなものである。現在（皇帝は年少であられ），あらゆる権限は将軍が一手に握っておられます。正に神竜が飛翔し，猛虎が跳躍するかのごとくであり，上下を問わず，すべての部下はあなたのお心のままでございます。後にこの言葉は勇ましく雄壮な気概を形容するようになった。“龙行虎步”と用法はほとんど同じで，勇猛な人を形容するプラス評価の語であり，書き言葉として用いる。現代の用法：“张将军龙骧虎步，不是凡人。”（張将軍は意気軒昂で，並々ならぬお方だ）

㉗“为虎作伥”（虎の手先になる）

宋の孫先憲の『北夢瑣言逸文』巻四にある“凡死于虎，溺于水之鬼号为伥，须得一人代之。”（虎に殺されたり，水に溺れたりして死んだ者の幽霊は倀といい，誰か一人を身代わりとして道連れにする）から来た言葉である。古代の迷信や言い伝えでは，人は虎に食い殺されると，その霊魂は虎の手下にされてしまうという。この霊は“伥鬼”といい，人を捕まえて虎に供するとされている。後にこの成語は悪人の片棒を担ぎ，悪事をはたらくこ

とのたとえとなった。マイナス評価の語であり，主に書き言葉として用いる。現代の用法:“他们对违法乱纪的人不仅视若无睹，而且为虎作伥。”（彼らは法に背き，規律を乱すやからを看過するどころか，その手先となって悪事に加担している）

㉘ “狼吞虎咽”（狼や虎のようにむさぼる）

元のいい方は“狼餐虎噬”で，“餐”は食べる，“噬”はかんで飲み込むという意味である。出典は『元曲選』517の“……将各样好下饭，狼餐虎噬。”（……さまざまなごちそうをむさぼり食った）で，やがて“狼吞虎咽”のいい方が定着した。狼や虎のように，食べ物をがつがつとかき込むことをいい，多く話し言葉で用いる。現代の用法:“他吃起饭来狼吞虎咽，从来不好好儿嚼。”（彼は食事となるとがっついて食べ，よくかもうとしない）

㉙ “虎尾春冰”（虎の尾と春の氷）

虎の尾を踏み，春の薄くなった氷の上を歩く。非常に危険な状況にあって冷や冷やすることのたとえであり，『尚書・君方』の“心之忧危，若蹈虎尾，涉于春冰。”（虎の尾を踏み，春の氷を渡るように，生きた心地がしない）から生まれた語である。多く書き言葉として用いる。現代の用法:“公司面临破产，家庭面临崩溃，黑社会的催债电话接连不断，他的处境犹如虎尾春冰。”（会社は倒産寸前，家庭も崩壊寸前，暴力団からは取り立ての電話がひっきりなし。彼の境遇はまるで虎の尾を踏み，春の氷を渡るようだ）

㉚ “谈虎色变”（虎の話が出るだけで顔色が変わる）

宋の『二程遺書』にある“真知与常知异。尝见一田夫曾被虎伤。有人说虎伤人，众莫不惊，独田夫色动异于众。”（本当に知っているのと常識として知っているのとでは訳が違う。以前，虎にかまれたことのある農夫と出会った時のこと。ある人が，虎が人を襲った話をし，これを聞いた人は皆怖がったが，その農夫だけはほかの人と違う反応を示した。にわかに顔色を変え，縮み上がってしまったのである）に由来する言葉である。この成語は本来，虎の真の恐ろしさは虎に襲われたことがある人にしか分からない，という意味であったが，やがて，恐れているものが話題に上るだけでナーバスになることのたとえとなった。話し言葉，書き言葉，いずれでも用いる。多くマイナス評価の語として，人についていう。現代の用法:“一提起那件事，他就谈虎色变。”（その話になった途端，彼の顔色がさっと変わった）

㉛ “坐山观虎斗”（山上に座して虎の闘いを眺める）

『戦国策・秦策』の“今两虎争人而斗，小者必死，大者必伤，子待伤虎而刺之，则一举而兼两虎也。”（今，2匹の虎が人間を奪い合って争っているが，弱者は必ず死ぬであろうし，強者もまた無傷では済まないはずだ。勝負がつくのを見届けてから，手負いの虎を殺せば一挙両得ではないか）から来た言葉である。また清の曹雪芹の『紅楼夢』69回には，“凤姐虽恨秋桐，且喜借他先可发脱二姐，用‘借刀杀人’之法，‘坐山观虎斗’，等秋桐杀了尤二

姐，自己再杀秋桐。”（王熙鳳は秋桐を憎んでいたが，うまいこと彼女を利用してまず尤二姐をのけ者にし，「刀を借りて人を殺す〈自分の手を汚さずに人を陥れること〉」や「他人の争いを高みの見物」の手を使い，秋桐が尤二姐を殺してから，今度は自分の手で秋桐を片付けることにした）というくだりがある。人のけんかを傍観することのたとえであり，話し言葉としても，書き言葉としても用いる。現代の用法：“对以色列和巴勒斯坦之间的争端，他们采取的是坐山观虎斗的态度。”（彼らはイスラエルとパレスチナの紛争を座視する態度を取っている）

㉜ “虎啸风生，龙腾云起”

虎が吠えると風が起き，竜が昇ると雲が起こる。虎は風を操り，常に風を従え，竜は雲を操り，常に雲を従えているという言い伝えにちなんだ言葉で，傑物が時を得て世に現れ，大きな影響を与えることのたとえである。『周易・乾・文言』の“云从龙，风从虎，圣人作而万物睹。”（雲は竜に従い，風は虎に従うように，聖人が現れる時，初めて万物の実体が照らし出される）に基づく言葉であり，『北史・張定和伝論』には“虎啸风生，龙腾云起，英贤奋发，亦各因时。”（虎が風を呼び，竜が雲を呼ぶように，時代が英傑を呼ぶのである）と記されている。プラス評価の語であり，主に書き言葉として，いにしえの人物について用いる。現代の用法：“秦失天下，项羽、刘邦虎啸风生，龙腾云起。”（秦の世が終わりを告げ，項羽や劉邦が風雲に乗じて頭角を現した）

㉝ “虎虎有生气”

勇ましく，元気はつらつとしている。“虎虎”は勇猛で、りりしいという意味であり，この言葉は，威勢がよく，生命力あふれる様を形容する。よく文章のスタイルを形容する際に用いるが，人についていう場合もある。例文：“他的文章在两千年后的今天仍然虎虎有生气。”（彼の文章は2000年後の今日においても，なお力強く，生彩を放ち続けている）

㉞ “虎豹驹有食牛之气”

虎豹の駒は食牛の気あり。『太平御覧・獣・虎』に“尸子曰：虎豹驹，虽文成文，已有食牛之气。”（屍子は「虎や豹の子は，まだ斑紋もはっきりしないころから牛を食おうとするほど意気盛んである」と述べた）とある。幼少のころから非凡な才能を持っていることのたとえであり，マイナス評価の語として，主に書き言葉で用いることが多い。例文：“这孩子刚四岁就与众不同，聪明过人，‘虎豹驹有食牛之气’，后生可畏。”（この子はまだ4歳になったばかりなのに，ずば抜けて頭がいい。虎や豹は子供でも牛を食らおうという気概があるというが，実に末恐ろしい）

㉟ “虎老雄心在，人老筋骨强”

虎は老いても雄志を抱き，人は老いても強健を誇る。年老いてもなお壮大な志を抱いている，あるいはかくしゃくとしている，という意味である。例文：“‘虎老雄心在，人老筋

骨强’，年近百岁的他，每星期都参加街道组织的义务活动。”（よく「老いてなお盛ん」というが，あのおじいさんは100歳近いというのに，毎週町内会の奉仕活動に参加している）

㊱ “画虎画皮难画骨，知人知面不知心”

虎の皮を描くことはできるが骨を描くのは難しく，人の顔を知ることはできるが心を知ることはできない。虎を描く際，虎の骨格を描くのが難しいように，人を理解しようとしてもその心はなかなか分からないという意味であり，人の心が測りがたいことのたとえである。例文：“俗话说：‘画虎画皮难画骨，知人知面不知心’，人的真正内心很难了解。”（ことわざに「虎の骨は描きがたく，人の心は分からない」というように，人の心の奥を知るのは難しい）

㊲ “虎心隔毛翼，人心隔肚皮”

虎の心は毛皮に隠され，人の心は腹の皮に隠されている。人の心を見透かすことはできないので，用心しなければいけないという意味である。例文:“常言说，虎心隔毛翼，人心隔肚皮。谁也不知道他到底安的什么心。”（虎の心は毛皮の向こう，人の心は腹の中ということわざがあるけれど，あいつも腹の中で何をたくらんでるか分かったもんじゃない）

㊳ “前怕狼，后怕虎”

前方の狼と後方の虎を恐れる。ひどく臆病で，あれこれと気を回すことのたとえであり，多く話し言葉として用いる。例文：“你做事时要大胆、果断，不要总是前怕狼，后怕虎。”（物事は大胆かつ果断にやらなければ。二の足を踏むばかりではいけない）

㊴ “人凭志气，虎凭威”

人は意気，虎は威風。何かをしたり，人と接したりする際には気概が必要であるという意味である。例文：“俗话说，‘人凭志气，虎凭威’，人要有志气，有毅力，这样才能进取。”（ことわざに「人は意気，虎は威風」とあるように，気概と気力がなければ，人は前へ進めないよ）

㊵ “老虎屁股，摸不得”

虎の尻は触ることができない。ある人の気性が激しい，あるいはあまりに恐ろしいために，誰もがその逆鱗に触れるのを避け，批判を言いたがらないことをいう。例文:“他这个人独断专行，如果提反对意见，他会火冒三丈，可谓是老虎屁股摸不得。”（彼は独り善がりで，反対意見など言おうものなら，烈火のごとく怒るに違いない。まったく聞く耳持たずだ）

㊶ “虎多成群，人多成王”

虎多くして群れとなり，人多くして王となる。多くの人が集まれば，一大勢力となることのたとえである。例文:“俗话说，虎多成群，人多成王，我们大家齐心协力，一定能战胜困难。”（ことわざに虎多くして群れとなり，人多くして王となるというように，みんなで一致団結すれば困難に打ち勝つことができるだろう）

以上の言葉から，言語における虎のイメージが読み取れよう。

良い面：

「勇敢」「たくましい」「強大」「猛々しい」「純朴」「活発」「生命力に満ち満ちている」「雄壮」「異彩を放っている」「秀でている」「好漢の象徴」

良くない面：

「残忍である」「獰猛である」「人の邪魔をする」「危険なもの」「悪辣」「貪欲」「悪者の象徴」「無鉄砲」「好戦的」「恐ろしい」「信頼できない」「気性が激しい」

3　民話の中の「虎」

虎にまつわるものは79編あり，半分以上は虎とその他の動物の話である。ここでは五つを選んで紹介しよう。

⑴ “孙思[redacted]医虎”（孫思[redacted]，虎を治す）

〈河南巻　P. 96～97より〉（あらすじ）

医者の孫思邈はある年，家族を連れて唐河県の九里溝という所へ移り住んだ。彼がアンズの花を好んだので，人々は治療のお礼に彼の家の周りにアンズの木を植えていき，やがて九里溝は立派なアンズの林になった。

ある日，往診の帰り道，孫思邈が虎豹嶺を通り掛かると，何と道の真ん中に虎が寝そべっていた。彼はびっくり仰天し，あわてて左へよけたが，それに合わせるように，虎も道の左にやって来て通せんぼする。そこで今度は右へよけると，こちらも虎に阻まれてしまい，それならばと来た道を引き返そうとしたが，虎はすばやく彼の前に立ちはだかった。さては私を食おうというのだな。孫思邈は腹をくくり，地面にどっかと座って言った。「食うなら食え。」この言葉に虎は首を振り，彼に身を擦り寄せてきたので，孫は頭をひねった。「私を食おうというのではないのか。では一体……。」見ると虎が前足で自分の腕を指しているので，勇気を出してその腕をさすってみると，茶碗の口ほどもあるできものがあった。こやつ，治療をして欲しかったのか。そこで針をできものに突き刺し，膿を絞り出してから，膏薬を張ってやると，虎はぺこりとお辞儀をし，しっぽを振って去っていった。

それから十日あまりもたったころ，薬草採りの帰り道，孫思邈はまたもや虎に通せんぼされた。左へよけると虎も左へ，右へよけると虎も右へ。よく見ると，先日の虎ではないか。そこでできものを触ってみると，ほぼ完治していたので虎に言い聞かせた。「おまえは治ったよ，もう私に用はなかろう。」すると虎が自分に擦り寄ってきて身を伏せ，しっぽで背中をたたくので，孫は試しに聞いてみた。「おまえの背に乗せてくれるというのか。」虎

はうんうんとうなずいた。「傷が治ったばかりのおまえに乗るわけにはいかんよ。」けれども虎がどうしても彼を行かせようとしないので，あきらめた孫はやむなく虎にまたがり，家まで送ってもらった。それ以来，虎はアンズの林に常駐し，孫の送り迎えをするようになった。行き先がどこであろうと，どんなに遠くであろうと，孫が外出するとなると，虎は必ず彼を乗せて往復し，夜には彼の家の前で番をしたという。これが後世に名高い“虎守杏林”（虎がアンズの林の番をする）のいわれであり，孫思邈が虎に乗って往診に行く様を描いた昔の年画もこの昔話から生まれたのである。

⑵ “虎豹比武”（虎と豹が武芸を競う）

〈四川巻　P. 1206～1207より〉（あらすじ）

昔々，豹は虎の弟子であり，虎から武芸十八般を学んだが，やがて山の獣たちが虎を大王様と仰いでいることに不満を抱き始めた。

ある日，豹は山の獣たちに言った。「虎は俺の師匠だが，大したことないぜ。武芸にかけては俺の方が上だ。」

獣たちは目を丸くして尋ねた。「証拠でもあるのかい。」

「大ありさ，何てったって俺はやつが身に付けている武芸十八般はもちろん，ほかの武芸だってできるんだからな。」豹は大風呂敷を広げた。

獣たちはいぶかしげに言った。「でたらめ言いやがって，おまえの武芸が師匠より上だなんて信じられるかい。」

「疑うんなら，明日虎と試合をしてやろうじゃないか。その目でとくと見るがいい。」そう言い捨てると，すぐさま虎のもとへ向かった。

そして虎に，「あんたは百獣の王らしいが，武芸にかけちゃ俺の方が上に決まってる」と言い放った。

虎はこれを聞いて腹立たしく思ったが，何も言わなかった。ただ腹の中で，私からちょっと武芸を習ったぐらいで天狗になりおって，相手にしておれんわい，と思っていた。

虎が口を開こうとしないのを見て，怖気づいたのだと思い込んだ豹は，さらに図に乗って言った。「異存があるなら，明日決着をつけようじゃないか，山の獣たちの前で。」

「分かった」と虎は答えた。

そして翌日，獣たちが見守る中，両者の試合が始まった。開始早々，豹はものすごい勢いで虎に飛び掛かっていったが，虎が落ち着き払ってすっと身をかわしたので，豹は勢い余って岩に頭を打ち付け，気を失ってしまった。

正気に返り，大いに恥じ入る豹に虎は言った。「武芸はこつこつと磨くものだ，少々派手な技を覚えたぐらいでは話にならんわ。」

⑶ “老虎为什么不会上树”（虎が木登りできない訳）

〈北京巻　P. 602より〉（あらすじ）

猫が虎に似ているのか，それとも虎が猫に似ているのか。猫は小さななりをしているが，実は虎より年長で，虎の伯父に当たる。だから虎が猫に似ているというのが正しい。

虎がおじさんに似ているのは見掛けだけではない。一挙手一投足までもすべておじさん似である。虎は飛び掛かる，飛び跳ねる，身をかわす，身を翻す，など数々の武術を身に付けているが，これもすべて猫おじさんから教わったものだという。けれどもなぜ木登りは教わらなかったのだろう。

虎は生まれつき顔立ちが立派で，周囲を威圧し，百獣がひれ伏すような風格を備えていた。おまけにすさまじい力の持ち主で，走ると足元に風が起こり，高い所から吠えると山や地が揺れるほどであった。猫おじさんは虎を非常にかわいがり，自慢の武術をすべてこの甥っ子に伝授して百獣の王に鍛え上げてやろうと思い，ある日，甥っ子に言った。「わしの武術をすべて会得したら，おまえは動物たちの頂点に君臨できるだろうよ。」虎は大喜びで，その日からおじさんに弟子入りした。

何日か修行した後，虎は猫に，「もうどのくらい技を覚えたのでしょうか」と尋ねたが，「まだまだ序の口だ。気が早いぞ」と言われ，それを謙虚に受け止めた。

また何日か修行して，虎は尋ねた。「おじさん，もうどのくらい技を覚えたんだろう。」「ようやく半分というところだな。」これを聞いて思い上がった虎の心の中で，良からぬ考えが頭をもたげてきた。将来，俺が百獣の王になったら，上に立つのは俺か，それとも猫の野郎か。

また何日か修行して，虎はおじさんに向かって乱暴に吠え立てた。「おい，技はあといくつあるんだよ。」猫は様子がおかしいことに気付いて一計を案じ，「これで免許皆伝だ，もうおまえに教えることは何もない」と答えた。すると虎は手の平を返したように殺気をみなぎらせ，「腹が減ったからおまえを食ってやる」と怒鳴って猫に躍り掛かった。が，猫はひらりと飛び上がり，大きな木の根元へ着地すると，するすると樹上に登っていった。これを見た虎はしばし呆然としたが，すぐさまこずえに座る猫にねだり始めた。「木登りなんて，まだ教わってないよ，教えて，ねえ，教えてったら。」猫は木の上から冷たく言い放った。「この極悪非道の恩知らずめが，おまえなんぞに木登りを教えたら，わしはひとたまりもないわ。」

虎が木登りを覚えられなかったのは，おじさんにむごい仕打ちをしたからなのである。

⑷ “老虎外婆”（虎のおばあちゃん）

〈浙江巻　P. 600～601より〉（あらすじ）

昔々，ある幼い姉妹がおり，ある日，お母さんがおばあちゃんの家へ行くので，二人で留守番をすることになった。出掛ける前，お母さんは二人に言いつけた。「夜は早く寝るのよ，むやみにお外に出てはいけません。」

夜，姉妹がご飯を食べ終わると，突然誰かが戸をたたいた。「どなた」と尋ねると，「私だよ，おばあちゃんだよ」との返事。姉妹はおばあちゃんが来たと知って，大急ぎで戸を開けた。その拍子に風で明かりが消えてしまったので，姉が再び明かりをつけようとすると，おばあちゃんは言った。「明かりをつけないでおくれ。このところ目が痛くてね，明かりを見るのがつらいんだよ。」

姉妹が腰掛けを取りに行こうとすると，おばあちゃんは言った。「ああ，いらないよ。ここのところお尻におできができてね，腰掛けに座ると痛いんだ。代わりに酒つぼを持ってきておくれ。」

そしておばあちゃんは姉妹が持ってきた酒つぼに腰掛けたが，おばあちゃんが長いしっぽをつぼの中に垂らしているのを見た妹は尋ねた。「おばあちゃんには何でしっぽがあるの。」おばあちゃんはあわてて答えた。「これはしっぽじゃないよ，年寄りが巻く毛糸の帯さ。」妹は今度，おばあちゃんの体に生えた毛をなでながら尋ねた。「おばあちゃんは何で毛むくじゃらなの。」「これは毛じゃないよ，おじいちゃんが買ってくれた毛色の外套さ。」少し間を置き，おばあちゃんは再び口を開いた。「おまえたち，おばあちゃんのほっぺにちゅっとしておくれ。そしたら飴をあげるよ。」姉妹たちがそばに来ると，おばあちゃんは二人をなで回してつぶやいた。「うんうん，お姉ちゃんは肉付きがいいねえ。おっと，よだれが出ちまったよ。こっちの子は……。おや，肉がこれっぽっちもありゃしない。」そしてすぐに，「もう遅いから寝るとしよう。おばあちゃんと一緒に寝るのはどっちだい」と言い，姉がおばあちゃんの胸に飛び込んでいった。妹も一緒に寝たいと思ったが，おばあちゃんにはしっぽがある上，毛むくじゃらなのを思い出し，怖くなっておばあちゃんたちと別々に寝ることにした。

夜中，妹はおばあちゃんがぴちゃぴちゃと何かを食べているのに気が付いた。「おばあちゃん，何を食べてるの。」「お菓子だよ。」「私にもちょうだい。」おばあちゃんがくれたお裾分けを触ってみると，それはお菓子などではなく，何と人間の指であった。妹はおばあちゃんが偽者だと悟り，知恵を振り絞った。「おばあちゃん，うんちがしたい。」「床にしておきな。」「床には虫がいるもの。」「じゃあ，壁にしたらいい。」「壁には壁虫がいるの。」「じゃあ，かまどの後ろ。」「かまどの後ろにはかまど虫がいるの。」「なら，おまえにひもをくくり付けてやるから，あっちの部屋へ行っといで。」

妹はその部屋へ行くと，ひもを大きな石に縛り付けた。「済んだかい。」「まだ。」そしてずいぶんたったころ，しびれを切らしたおばあちゃんはひもを手繰り寄せたが，ひもの先

に付いて来たのは大きな石。孫が逃げたことを知ったおばあちゃんは，すぐさま後を追い掛けて庭に飛び出した。すると上からくすくすと声がするので，見上げてみると木の上に妹がいた。「そこにいたのかい，待っておいで，すぐに登っていって，おまえを食ってやるよ。」「おばあちゃん，来ないで，その代わり木の実を取ってあげるから。」妹はおばあちゃんの口に木の実を放り込んだ。「おいしいでしょ，ほら，お口を大きく開けて。」そう言うと妹は，おばあちゃんの喉目掛けて鋭い短刀を投げ込み，息の根を止めた。偽のおばあちゃんの正体は虎の化け物であったという。

⑸ “龙虎为什么相斗”（竜と虎が戦う訳）

〈吉林巻　P. 377より〉（あらすじ）

その昔，竜と虎はある柳の大木の下で兄弟の契りを結んだ仲であったという。竜が兄，虎が弟で，彼らは毎日柳の下で酒を酌み交わし，一心同体と思われるほど仲むつまじかった。

やがて，樹齢1000年を経て霊力を授かった柳の木が，竜と虎の仲の良さに悪意を抱くようになった。ある日，竜がいつものように酒と肴を携えて柳の下にやって来た。しばらく待っていたが，虎が来ないので，どうしたのだろうと思い始めたところへ，柳の精がささやいた。「あなたはお人よしですね，まだ虎を待っているなんて。虎はさっき来ましたが，口を極めてあなたをののしった上，あなたなんか友達じゃないと捨て台詞を残して去っていきましたよ。」竜はこれを聞いて腹を立てた。こんなによくしてやってる俺をののしるなんて。おのれ許せん，落とし前をつけに行くぞ。竜は怒りのあまり，物も言わずに去って行った。

竜が立ち去ったすぐ後，今度は虎が酒と肴を携えて柳の下にやって来た。しばらく待っていたが，竜が来ないので，どうしたのだろうと思い始めたところへ，柳の精が再びささやいた。「あなたはお人よしですね，まだ竜を待っているなんて。竜はさっき来ましたが，口を極めてあなたをののしった上，あなたなんか友達じゃないと捨て台詞を残して去っていきましたよ。」虎はこれを聞いて腹を立てた。こんなによくしてやってる俺をののしるなんて。おのれ許せん，落とし前をつけに行くぞ。虎は怒りのあまり，物も言わずに去って行った。

翌日，竜も虎も手ぶらでやって来た。竜は虎の剣幕を見て，ますます柳の精の話を信じた。虎もまた竜の剣幕を見て，柳の精の話は本当だったと確信した。義兄弟たちは両者鼻息荒く，どちらも口を開かぬまま取っ組み合いを始め，日が暮れるまで殴り合った。柳の精は胸躍らせてこの戦いに見入り，一人悦に入ったのであった。

格闘は結局三日三晩続き，どちらも満身創痍，さらに飢えと疲れも重なって，竜も虎もどうと地に倒れ，そのまま息絶えた。

それから一人の乞食が柳の木の下に竜と虎の屍を見付け，すぐさま親分に知らせた。「大柳の所に竜と虎が死んでます，わしら数人で食っても何日かは持ちますぜ。」そこで乞食たちは手に手に鍋釜を携えて，柳の木の下にぞろぞろと出掛けていき，かまどをしつらえて竜と虎の肉を鍋で煮込み始めた。ところがまきが乏しくなったので，乞食たちは柳を切り倒し，さっさとかまどにくべてしまった。「とほほ，人の仲は裂くもんじゃない。おかげで竜も虎も鍋の中，そして私も……。」柳の精はかまどの中でぼやくしかなかった。

民話(1)は人と虎が互いを思いやる美談であり，こうした話はほかにも見られるが，いずれも虎の義理堅さを描いている。ここに見られる虎は，凶暴で，人を食べはするが，一方で人の情けを解し，恩に報いるという姿で描かれており，人々の虎に対する矛盾した心理を反映している。民話(2)，(3)は虎と豹，虎と猫の話であり，虎とほかの動物を描いたものはほかにも数多くある。あるものは百獣の王として隆盛を極め，畏敬の念を抱かせる虎を描き，あるものは間抜けで不誠実，そして残酷な虎を描いているが，これもまた，虎に一目置きながらも恐れを抱く，人々の矛盾した心理を映し出している。民話(4)のような，虎が女性に化ける話は江蘇巻・陝西巻・四川巻・吉林巻にもあり，民話(4)で，虎は残忍で狡猾な悪女に化けているが，別の話では優しく気立ての良い女性に化けたりしている。ただいずれにせよ，このたぐいの物語は必ずといっていいほど，「人間界から姿を消して山林へ戻っていく」という結末に終わる。こうした神話や昔話から，虎と人間の緊張関係が読み取れるが，さらに太古の昔，天と人が一つで，人と獣も近しかったころを懐かしむ気持ちも感じられるのである。民話(5)は虎と竜の物語であるが，中国の伝統文化において，虎は竜に次ぐものとされていた。ただし守護神としては，その地位に高低の別はなく，『周易』では竜虎を乾坤，天地，陰陽，男女にたとえており，兵法書の『六韜』では強豪が相争うことを“龙虎斗”（竜虎の闘い）と称している。このほか，中国医学には“龙虎针法”，書道には“龙虎篆”があり，昔，科挙の合格者を発表することを“发‘龙虎榜’”といった。竜虎は古代中国で最も重要な守護神，霊獣であり，相互に補完し合い，剛柔が均衡し，陰陽相和す，という文化意識を体現する竜虎は，中華民族の文化に広く，深く影響を与えた。前述した言葉にもこの点が見受けられ，例えば“龙争虎斗”（竜虎相搏つ）のように竜虎を対比させるところにも，民族間の衝突と融合の歴史が秘められている。中華民族は多くの民族が混ざり合って形成された民族であり，原始集落はそれぞれ独自の崇拝対象を持っていたが，やがて竜をあがめる集落と虎をあがめる集落が二大勢力となって竜虎に対する崇拝を各集落に広め，ついに竜虎は全国でも一二を争うほどの絶大な信仰を集めるに至ったのである。

４ 「虎」と十二支

虎は十二支の第三位であり，十二の干支の「寅」に当てはめられている。この「寅」という字は，眼光鋭く獲物を狙い，王者の貫禄を漂わせて真正面から迫ってくる猛虎をほうふつとさせる。甲骨文字の初期の寅の字は矢の形をしているが（図６・７），『説文』によれば，寅の字は春を間近に控えて上昇する陽の気を表しており，この気は地表が凍土に覆われていても，それを突き破って噴き出してくるという。つまり寅に虎を当てるのは，虎の雄々しく力強い意気が不屈であることを雄弁に物語っているのである。十二支と人の運勢には深い関連があるとする説は昔から跡を絶たず，十二支が人の性格や運命を決め，十二支から性格や将来の運勢を予見できるなどといわれてきた。十二支によって人生を占うことは，実は十二支の動物が有している特徴を人間に宿らせようとする行為であり，古代人は，十二支のいずれかの動物神が人の生年月日を支配し，その人の生涯の性格や運命に大きな影響を与えると考えていた。十二支占いはシビアにいってしまえばただの迷信であるが，一種の遊びとして捉えるならそれなりの面白みがある。また十二支の動物にはそれぞれ秀でたところがあり，人々は自分の干支に特別な愛着を抱き，自分にもその干支の特徴があって当然と考えているため，意識するしないにかかわらず，思考や行動においても干支のまねをし, 少しずつその長所を伸ばして短所を克服していき, やがては干支と似通った性格的特徴を形成するのであろう。

図６

図７

“虎在东方，象征着强大威猛，象征着权力，属虎的人也同样引人注目是一个又热情胆子又大又爱造反的人，为人处事也是一个难以捉摸的人物受人敬重，它能使家庭避开三大灾难，那就是火，贼和鬼，假如你能对它那生龙活虎的性格能习惯，那么在虎的周围会很幸运，属虎的人对生活是乐观的，也很有感染力，它能唤起人们心中的各种感情，唯独没有冷漠。总之，属虎的人很容易成为吸引人和注意的中心，由于它生来就不知疲倦并有些鲁莽，因为它通常行动很快，他生性多疑和摇摆不定，常作出草率决定作事也非常公开，从不憋在心里，

同时在为人方面，也是个诚实柔情慷慨大方的人，而且具有奇妙的幽默感，属虎人的生活意志是很强的，不管他现在有多么潦倒，所遭受的打击和成见有多深，他都表现出不在乎和毫不气馁，哪怕是只剩一星火花他也要用它点燃生命之火，显示出永不熄灭的顽强的精神，属虎的人大体有两种，一种是温和的敏感的和有同情心的，一种是顽固自私不讲理的，属虎人内心世界是浪漫的，他爱玩，感情丰富，与它恋爱和结婚姻会有很多感受，他或她在嫉妒时会表现出过分的占有欲和爱争吵，有意思的是，他一生中有两缺点竟是鲁莽和优柔寡断，总之，属虎人是开朗的乐观的。”（訳:虎は東に位置し，強大，勇猛，権力を象徴しているが，これは寅年生まれの人にも通じる特徴で，彼らは意欲的で度胸があり，反骨精神が旺盛である。そのキャラクターやライフスタイルはベールに包まれており，人に尊敬される。寅年の人は家庭の三大災難である火事，盗難，幽霊とは無縁なので，彼らのバイタリティーにあふれた性格になじむことができる人は，その周りにいると幸せになれるであろう。寅年生まれは人生に対して楽観的で，優れた感化力を持ち，人々のさまざまな感情を呼び起こすことができるが，決してクールというわけではない。ともあれ，寅年生まれは人を引き付け，みんなの注目の的になりやすい。また生まれつきタフで無鉄砲な嫌いがあり，普段から行動が素早いが，疑い深く，すぐに気持ちがぐらつくため，いいかげんに物事を決めてしまうことがしょっちゅうである。また何をするにも非常にオープンで，胸にしまっておくことを知らず，人柄は誠実で優しくて，気前がよく，素晴らしいユーモアのセンスを持っている。寅年生まれは意志が固く，今どれほど落ちぶれていても，どれほど深い打撃や偏見にぶち当たったとしても，それを気に掛けたり力を落としたりする素振りなど微塵も見せず，たとえ一縷の望みしか残されていなくても，それを頼りに命の炎を燃え上がらせ，決してあきらめない不屈の精神を見せ付ける。寅年の人は大きく二つのタイプに分かれる。一つは温和で敏感，そして思いやりのあるタイプ，もう一つは頑固で勝手，分別がないタイプである。ロマンチストで，遊び心にあふれ，感情豊かな寅年生まれと恋愛や結婚をするとさまざまな思いを抱くことになるだろう。彼らは嫉妬すると過剰な独占欲を見せ，すぐ口げんかになるからだ。面白いことに，寅年の人の人生には無鉄砲なのに優柔不断という二つの欠点が付きまとうのだが，総じて陽気で楽観的である）

この性格判断から, 寅年生まれの人の性格は次のようにまとめることができるであろう。

良い面：

「強大」「意欲的」「度胸がある」「尊敬される」「楽観的」「中心的な存在」「素早い」

「オープン」「誠実」「気前がいい」「ユーモアがある」「意志が固い」「粘り強い」

「感情豊かである」

良くない面：

「無鉄砲」「疑い深い」「動揺しやすい」「独占欲が強い」

5　おわりに

「虎」の原型は中華民族の形成期にまでさかのぼる。原始の時代，獰猛な野獣と向き合った先人たちは，彼らを征服したいと考え，それをイメージ化して自分のシンボルとしたが，中でも「虎」を選んだのは虎の雄々しさに魅せられたからである。中華民族の始祖の一人とされている伝説の神，「伏羲」は虎神であり，また自然を人格化した結果，「虎」は十二支でも最良の部類に属する干支となった。「百獣の王」と称えられる虎は，他を圧倒する実力ゆえに動物界で覇を唱えているが，言語文化や民俗文化においても，強者や王者のイメージ，英雄豪傑のシンボルとして受け取られている。前述した“虎气”，“虎步”，“虎视”，“虎背熊腰”，“虎啸风生”などのほか，現代中国語ではあまり用いられない“虎士”（勇猛な武人），“虎夫”（勇者），“虎彪”（たくましい），“虎旅”（精鋭部隊）などの言葉もあるが，これらは「虎」がその雄々しいイメージから，自ずと軍事に結び付けられ，屈強な軍隊のシンボルとされたために生まれたものである。さらに虎には重厚なイメージがあるため，尊敬や羨望の対象という色彩も帯びている。十二支の「虎［寅］」が人生の理想像であるのは，「寅」の刻は明け方の 4 時ごろで，良き一日の始まりに当たり，さらに寅月とは正月のことで，良き一年の始まりに当たるためであり，「虎［寅］」は干支としても羨望の的なのである。

反面，虎は獰猛，危険，残酷の象徴でもあり，“虎口”，“虎穴”などの言葉や一部の民話はこの負の面を反映している。虎はこの本性ゆえに，悪者の象徴とされ，“龙争虎斗”は横暴の限りを尽くす虎のイメージを映し出している。十二支の虎のイメージは極めて芳しく，民話のイメージは好ましいものとそうでないものがあり，後者がやや勝っている。そして言語におけるイメージもやはり二面的であるが，こうした人々の相反する心理，すなわち虎を恐れながらも敬うという心理は，多くの原因から生まれたものである。「白虎」は古代中国の四神の一つであり，またはるか昔，虎は農業の大敵である猪を主な獲物としていたため，客観的な意味でも人類の友人であった。“虎虎有生气”などの言葉にも人類の「虎を愛する」心理がうかがえ，この心理は言語だけでなく，彫刻や絵画，切り紙，服飾といった民間芸術にも如実に現れている。虎のイメージは何百年，何千年もの長きにわたり，絶えず創造と変化を繰り返し，常に生命力をみなぎらせているのである。

注

1）杜季良：漢代の名高い才人。
2）劉巴：字を子始といい，年若くして策略にたけ，その名は巴蜀の地に知れ渡っていた。
3）昭奚恤：楚の国の名将で，北方諸国は彼を恐れた。

4）帳簿を管理し，庶務をつかさどる官。

主要参考文献

（1）郝懿行『爾雅義疏』北京市中国書店影印本
（2）邱崇西（1983）『俗語五千条』陝西人民出版社
（3）北京大学中文系（1987）『歇後語大全』
（4）鄭宣沐（1988）『古今成語詞典』中華書局
（5）劉潔修（1989）『漢語成語考釈詞典』商務印書館
（6）張清常（1990）『胡同及其他』北京語言学院出版社
（7）武占坤・馬国凡（1991）『漢語熟語大辞典』河北教育出版社
（8）呉裕成（1993）『人與十二属相』天津大学出版社
（9）馬如森（1993）『殷墟甲骨文引論』東北師範大学出版社
（10）袁珂（1993）『中国神話通論』巴蜀書店
（11）王紅旗（1997）『神妙的生肖文化與遊戯』山東友誼出版社
（12）張晧（1997）『十二生肖』湖北教育出版社
（13）史有為（1997）『成語用法大辞典』大連出版社
（14）『漢語大詞典』（1990～1993）漢語大詞典出版社
（15）『語海』編輯委員会（1999）『語海』上海文芸出版社
（16）『古代漢語詞典』（1999）商務印書館